

<追悼文>たった一度の講義

今泉, 裕美子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

56

(終了ページ / End Page)

56

(発行年 / Year)

1995-02-24

たった一度の講義

今 泉 裕美子

中本先生と初めてお会いしたのは、先生が大きな手術を終えられ、ようやく大学に戻られたころだったと記憶しております。新しい都立大学の施設が素敵に整っていること、かかさずプールで泳いでいること、体力も見事に回復しつつあることを愉快そうに話していらっしやいました。その時のころがるような朗らかな声と、体全体から笑顔が満ちあふれているような印象を受けたこと、強く心に残っています。

私はちょうどその年あたりから、自分の研究（日本－ミクロネシア関係史）と沖縄との深い結びつきを考え、これを具体的なものにしようと、逡巡しながらも手探りで動き始めつつありました。このような時に、先生がご自身の研究経験を語って下さったことは、私が沖縄研究に向かううえでの大きな力のひとつとなりました。

先生が語られたのは、沖縄研究に携わることの厳しさ、しかし、それを追究しつづけることで得られる楽しさ、豊かさであり、さまざまな専門分野の人達が、沖縄出身か否かを問わずにその楽しさを共有してゆこう、というものでした。そして、先生が現実との厳しい緊張関係の中で研究を続けられたのは、良い仲間にも恵まれたことにあり、それを冲文研と関わったことなかで話してくださいました。こうした意味からも研究所を大切に考えられ、今後の活動に大きな抱負を持って力を注いでおられるのがよくわかりました。帰りがけの電車の中では、言語から沖縄の社会、文化の有り様を説明され、そのおもしろさに夢中になってメモをとったこと、これが先生から受けた、たった一度の講義となりました。

先生が奥武島のご出身であり、奥武島が南洋群島と深い関わりをもってきたことから、いつか必ずご案内くださるとお約束いただいております。かつて奥武島に立ち寄ったときに、島の皆さんが「中本先生と調査に来てくれるのを待ってるよ。中本先生をきっと連れてきてよ。」と声をかけて下さったのに、実行されないままとなりました。先生とはご一緒できなくなりましたが、先生から頂いた沖縄研究への志と一緒に、奥武島を訪れたいと思います。

先生がのこされたご研究、そして先生と沖縄研究を分かちあってきた方々のなかに先生が生きつづけ、われわれの沖縄研究をあの笑顔で見守っていてくださるのだと感じています。

(津田塾大学助手)